

テキスト

ヨハネによる福音書 20章19～23節

子どもと親のカテキズム 問40

イースターに際して、キリストの復活が何をもたらすものなのかを捉えたい。それはひと言で言えば、大いなる逆転であり、それは復活された主イエス・キリストとの出会いを通してもたらされる。何に対する逆転なのか、復活とは文字通り死に対する逆転である。

1. 悲嘆と恐れ

20:11 マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、

主イエスが十字架に架かって殺されてしまった、その死別の悲しみに加えて、墓の中にあるはずの主イエスの遺体さえ失われてしまうという悲劇が起きた。そこでマリアは、涙にくれている。死と、喪失と、悲しみの涙。これが全ての人の人生の末路であり、この時点でマリアは、主イエスの生涯さえもその結末から自由ではなかったという事実を突き付けられ、そこで絶望する以外にないという、これも、この世界に残された全ての人々が味わうべき悲嘆に、彼女は暮れていた。このマリアの悲嘆と、弟子たちの、意気消沈し、恐れて隠れ家に引き籠る様は、並行している。

20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

弟子たちは主イエスの十字架の際、自分たちも捕ってしまうのではないかという恐れの中で逃げ去り、ユダヤ人当局者たちを恐れて、鍵をかけて家に閉じこもっていた。しかし、これでもう終わりだと思っていたところに、逆転が訪れる。その時、主イエスは、その弟子たちが隠れていたアジトの真ん中に現れて、「よくも裏切ったな」では

なく、「平和があるように」と言ってくださった。そう言って、主イエスは、御自分の手と脇腹とを見せてくださった。幽霊ではなく、幻想ではなく、現実のこととして、主イエスは一度確かに死んだが、しかし死の淵から逆転して、復活したことを示された。それを前にした弟子たちは、「主を見て喜んだ (20:20)」復活の主に出会うということは、私たちの不安と恐れの中を突き破るようにして湧き上がってくる喜びに出会うことである。復活の主との出会いは、不安と恐れと、死の悲嘆のまさに只中にある。

2. 聖霊の付与に先行する派遣

そのあと主イエスは重ねて言葉を連ねられる。20節には、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」という言葉があるが、これが、22節の「聖霊を受けなさい」という言葉の前にあることについては、一考の価値がある。それは、聖霊による命の息吹と力の付与に先立って、遣わすという派遣の言葉が語られているということである。必要な力は、主に派遣されて歩み出す中で与えられるものであり、ここでは主の召しを受けて、主の弟子として歩み出す、行動を起こすということが先行する。これは、自分の足元を見て、自分の非力を嘆き、それゆえに一步踏み出せず、行動することをためらうような私たちへの励ましでありチャレンジである。

3. 聖霊を受けよとの命令

そして、この19節から23節までのひとかたまりの御言葉において、最も強い語気をもって、命令形で語られている唯一の言葉が、22節の「聖霊を受けなさい」と主イエスが言われた時の、「受けよ」という動詞である。これは、英語で言えば receive であって、get ではない。私たちが聖霊を受け止めよという意味の言葉である。さらに主イエスはその言葉を、弟子たちに息を吹きかけな

がら言われた。私たちに求められていることは、その主イエスからの息吹の真下に立って、その息吹を浴び、吸い込み、受けることである。そしてそのことが、復活された主イエスにより強く命令されているのは、私たちの命がこの主イエスの息吹としての聖霊を受けるか否かで決定的に左右されるからである。

そしてこの22節の御言葉は、創世記2章7節を自ずと想起させる。

創世記2:7 主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。

この命の息を主なる神から吹き入れられたことによって、人間は生きる者とされた。そして復活の主イエスは再び、この心臓の鼓動からなる命を超えた復活の命の息吹を、ご自身からの聖霊を受けることを通して、私たちに与えてくださる。

この神さまから来る命の息吹の対極に位置していると言えるのが、イザヤ書の2章22節に表現されているような、自分からは命の息吹を生み出せない、この点について無力な人間であると、黙想的に関連付けることは許されることだと考える。

4. 聖霊と共なる罪の赦しの権威の付与

23節には、聖霊の付与による復活の命に至るための、不可欠なプロセスとしての罪の赦しが語られ、また罪の赦しの権威が、聖霊の付与と共に弟子たちに委託されている。創世記1~3章の文脈を見れば明らかであるように、罪は死をもたら

すものであり、その罪の問題の解決なしには、死の解決はない。そして罪の問題の解決は、赦しによって起こる。復活の命は、この罪の赦しと不可分である。

さらに、聖霊を受ける弟子たちに対して、ここで罪を赦す権威が委ねられている。それは弟子たちに与えられる聖霊なる神が、弟子たちの赦しの業を通して働いてくださることによって現実化することであるが、聖霊と共にもたらされる復活の命は、具体的には、主イエスに連なる平和の使者たちとして遣わされる弟子たちを介して、人びとへと伝播していくのである。

5. 解決

復活された主イエスが与えてくださる、新しい命の息吹としての聖霊を受けることによって、死と墓穴が私たちの生涯の最後の言葉ではなくなり、そこにあった涙が拭われ、恐怖におびえていた弟子たちは、その真ん中に現れてくださった主イエスによって平和を得、この後の聖書箇所ではトマスに信仰が与えられた。その復活の命の息吹である聖霊によってもたらされる解決を、ヨハネによる福音書は、自らの総括のようなかたちで、20章31節にまとめている。

20:31 これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

(吉岡契典)

テキスト ヨハネによる福音書 20章19～23節

(単元のねらい)

イースターに際して、死を超えて復活された主イエスを覚え、その復活の主との新しい出会いを得たい。私たちはイースターに際して、命と力の源である、神さまからの命の息吹（この文脈では聖霊なる神と同一視されている）を、教会の礼拝において吹き入れられるというビジョンを共有したい。

命の息吹に生がされる

今朝はイースターです。イースターとは、主イエスが死から復活されたことを記念する日です。このイースターの日の朝、11節に見られるように、マリアは泣いていました。墓穴の中にあるはずの主イエスの遺体がなかったからです。

主イエスが死んでしまって、その遺体さえ、どこかに持ち去られてしまった。マリアにとって、生きていくべき方が死んでしまった。もう取り戻すことのできない主イエスとの日々を思い、もうこれからどうしていったら良いのかわからず、彼女は悲しみ、泣いていました。この失望は、主イエスが十字架に架かれた時、ちりちりになって逃げて行った弟子たちにとっても同じことでした。

私たちにとって、死は終わりであり、それを前にして、私たちは無力で、墓の前に立って泣くことしかできない。悲しく、歯がゆいですが、これが現実でした。

けれども、私たちは今日ここで、信じられないような聖書の語りかけを聞きます。主イエスの生涯が書かれている福音書では、主イエスの死が最後のページにある事柄ではないのです。主イエスという方は、死を前にして、何もできない方ではありませんでした。

泣いていたマリアが後ろを振り向くと、死んで墓の中にいるはずのキリストが立っておられました。そして「婦人よ、なぜ泣いているのか」(15節)と声を掛けてくださいました。

さらに主イエスは、そのイースターの日の夕方、

今度は弟子たちの前にも現れてくださいました。弟子たちは主イエスの十字架の際、自分たちも捕まってしまうのではないかという恐れの中で逃げ去り、ユダヤ人当局者たちを恐れて、鍵をかけて家に閉じこもっていました。けれども主イエスは、その弟子たちが隠れていたアジトの真ん中に現れて、「よくも裏切ったな」ではなく、「平和があるように」と言ってくださいました。そう言ってくださった復活の主イエスのその存在自体から、弟子たちは恐れによって失っていた平和を取り戻し、力づけられました。

そして、この場面で特に印象的なのが、この後半の22,23節の言葉です。主イエスは弟子たちに、その息を吹きかけながら、「聖霊を受けなさい」と語られました。この言葉は命令形で記されていて、この部分の主イエスの言葉の中で、とくに強調されている言葉です。けれども、息を吹きかけると聞くと、かつて同じような聖書の言葉があったのを思い出さないでしょうか？ そうです。創世記の人間の創造の場面です。主なる神は、土の塵で人を形づくり、「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と創世記2章に記されています。主イエスはちょうどそれと同じようなことをされるのです。主イエスは弟子たちに息を吹きかけて、聖霊を受けなさいと言われました。そしてこれは明らかに、創世記で神さまが土の人間に命の息を吹き込まれたあの場面の再現です。

人間が、それによって生きようになったあの

命の息が、復活された主イエスによって、「聖霊を受けなさい」という言葉と共に、弟子たちに吹き付けられました。私たちの心臓の鼓動という命を超えた、復活の生命力を宿した命の息を、弟子たちは受けたのです。

旧約聖書のイザヤ書の2章には、「人間に頼るのを止めよ。鼻で息をしているだけの者に。どこに彼の値打ちがあるのか」という御言葉があります。しょせん鼻で息をしているだけの人間は頼りにならない。鼻で息をしているだけ、鼻呼吸だけしか知らない人間は、そのままでは、生きながらに死んでいると、聖書は語るのです。本当の神さまから来る命の息吹を受けなければ、キリストの十字架からくる命を受けなければ、人は、本当の意味では生きられません。

ある時、教会員の高齢のおばあさんが突然仰向けに倒れられて、呼吸が止まったということがありました。目の前でそれを見た私は、必死に人工呼吸を施しました。結果的には何とかかすかな息が戻ってその場はしのげたのですけれども、それは私にとって、忘れられない恐怖の体験でした。死が目の前に刻一刻と迫ってくる中で、いくら一生懸命息を吹き込んでも、私の息では、呼吸を失ってしまった体は、本当にびくともしないのです。生き返れと念じながら、一生懸命肺に息を送って、心臓を押すのですけれども、私の息には、命は宿っていないのです。私たちのこの命は、単純な酸素だとか二酸化炭素だとか、そういうものが支えているのではないということが、経験的に分かりました。神さまが吹きかけてくださる命の息によってこそ、人は生きる。そこから来るのではない息には、私たちを元気に生かすだけの力はないということを、本当に実感させられた経験でした。そして聖書は、この神さまからの命の息吹を私

たちに与えるということこそを目的として書かれたのだということが、今日の御言葉のページの、一番最後の20章31節にもはっきり記されています。「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」。

復活された主イエスは、日曜日に弟子たちの前に現れて、「平和があるように」と言われ、さらに弟子たちに息を吹きかけて、聖霊を受けなさいと言ってくださいました。実は私たちが、日曜日に教会に集まって、そこで神さまを、今やっているように礼拝する目的も、この聖霊に込められている主イエスの命の息吹を受け取って、再び元気に生き返るためなのです。教会とは、主イエスによって復活の命を吹き込まれた人たちの集まりです。そして、その教会で行われる礼拝こそが、私たちが、この主イエスからの命の息吹を浴びる場所です。

墓の前で泣いていたマリアの、その涙は復活された主イエスとの出会いによって止められ、部屋の中に閉じこもり怯えていた弟子たちは、復活された主イエスとの出会いによって、喜びました(20節)。復活の命の息吹は、もちろん私たちの心臓の鼓動が止まってからも力を発揮しますが、今生きていて、今泣いていたり、今怯えているような今日の私たちを、今、支え励ましてくれる大きな力でもあります。この主イエスから来る命の息吹に、生かされ続けたいと思います。イースターに復活された主イエス・キリストが、息を吹きかけながら「聖霊を受けなさい」と命じられた命の息吹を、今この礼拝で、正面から受け取り、自分の中に吸い込みたい。ここから、新しい息吹を吸って生かされたいと思います。(吉岡契典)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 20章22節

「そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい』」

ヨハネ20:19, 20をよみましょう。

1. でしたちはなぜあつまって、いえにかぎをかけていたのですか？何がこわかったのでしょうか？

2. でしたちはイエスさまがふっかつすることをしんじていましたか？

3. でしたちのまん中にあらわれたイエスさまは何と言いましたか？

4. イエスさまの手やわきばらのきずをを見てでしたちの気もちはどうかわりましたか？

ヨハネ20:21~23をよみましょう。

5. イエスさまをつかわした父とは、だれのことですか？

6. イエスさまにつかわされたででしたちにあたえられた力は、何でしたか？

7. わたしたちも、イエスさまによってつかわされていますか？

ヨハネ20:19, 20を読みましょう。

1. 弟子たちは何を恐れていたのですか？

2. 弟子たちはイエスさまが復活されることを信じていたでしょうか？

3. イエスさまは弟子たちの真ん中にあらわれて、どんな言葉をかけられましたか？

4. イエスさまの手と脇腹の傷を見て、弟子たちの態度はどう変化しましたか？

ヨハネ20:21~23を読みましょう。

5. イエスさまはどのような権威によって弟子たちを遣わされたのですか？

6. イエスさまに遣わされた弟子たちに与えられた力は何ですか？

7. 弟子たちはどんな働きに遣わされていくのでしょうか？それは、あなたにも関係がありますか？